

石垣島未来ワークショップによる世代間協働：
フューチャー・デザインとパスト・デザインによるアプローチ
Promotion of Intergenerational Collaboration in the Workshop for Future Ishigaki
Island: An Approach Combining Future Design and Past Design Methods

○藤岡 悠一郎¹、安西 俊彦²、岡 直子²、渡部 哲史¹

FUJIOKA Yuichiro, ANZAI Toshihiko, OKA Naoko, WATANABE Satoshi

1. はじめに

石垣島は固有の生態系や景観、特徴的な文化を有し、それらを基にした農業や漁業、観光業が地域の主要な産業である。気候変動に伴う水循環の変化、観光業や農業を取り巻く環境の変化は、流域の生態系や景観、地域文化に様々な影響を及ぼし得る。こうした様々な変化の下で地域の持続可能な発展を達成するために、多様なステークホルダーの協働のなかで地域の理想的な将来像を描き、そこに至る道筋を策定するアプローチを開拓することは農業農村工学分野における重要な課題である。

2023年に実施したワークショップでは、石垣島における将来像をバックキャストイング手法によって描きだし、現在の社会課題を抽出した。そのワークショップの成果として、1) 将来の希望について発言する傾向のある高校生の参加により未来志向が強い議論になる、2) 参加者がWS前に持っていた興味から社会課題への展開がみられる、3) 幅広い認識とアイデアが共有されることが明らかとなった(渡部ほか, 2024)。しかし、高校生のような若い世代の参加者が限定的であり、1回だけの結果であったため、複数回の検証が必要であった。また、若い世代は過去の石垣島の状況を知らないため、年長の参加者と将来像を描く際に知識や経験の差が浮き彫りになり、将来像の策定に向けてそうしたギャップをいかに埋めるかが課題となった。上記の背景を踏まえ、2024年に、将来像を描く異なる手法(フューチャー・デザイン法: 西條 2015)を用いたワークショップを実施した。本研究では、将来を描くフューチャー・デザイン法に、過去を一度振り返るパスト・デザイン法を組み込むことで世代間で異なる知識や経験を繋ぐ効果が期待できるかを検証した。

2. 方法

「石垣島未来シナリオWS」を、2024年11月9日(日)12時30分から17時まで、石垣市役所2階会議室にて開催した。参加者は石垣島に住む高校生25名、地域の住民7名、行政職員(石垣市役所、環境省)3名、九州大学及び国際農林水産業研究センターの研究者9名、九州大学の学生6名(ファシリテーター)の計50名であった。参加者を6グループに分け、各グループにファシリテーター1名を配置し、高校生4~5名、地域の方または行政職員1~2名、研究者1~2名の計7~8人とした。

プログラムをPart1からPart4の4つに分け、現在から過去、そして未来へと時間軸を動かしながら、石垣島の将来についてグループごとに議論した。Part1では、現在

¹九州大学比較社会文化研究院(Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University)

²国際農林水産業研究センター(Japan International Research Center for Agricultural Sciences)

【キーワード】ワークショップ、世代間協働、シナリオ、フューチャーデザイン

の石垣島に目を向け、良い点と悪い点について色の異なる付箋に書き出し、それらを模造紙に貼って整理しながら議論した。Part2 では、過去とのつながりに目を向けた。参加者に「Part1 で出した良い点・悪い点に関する過去の出来事について、知っていることはありますか？」と問いかけ、ホワイトボードに書きだしながら議論を行った。Part3 では、石垣島の未来に目を向け、理想的な将来像を考えた。Part4 では、再び時間軸を現在に戻し、Part3 で出した理想的な将来像を実現するために、今何をすべきかについて議論した。

3. 結果

本ワークショップで得られた成果の概要を下記に示す。

(1) 石垣島の将来像を考える未来ワークショップという手法が、若い世代にポジティブな影響を及ぼすのかを検証するため、高校生の参加人数を 2023 年の 6 人から本年は 25 名に大幅に増やした。その結果、同手法の高校生の満足度は全体的に非常に高く、自由記述の結果をみても多くの気づきをもたらす効果があったことが確認できた。

(2) 地域の将来像を検討する際に、パスト・デザイン法を組み込むことで、特に若い世代の参加者が地域の歴史的な背景を踏まえて将来を考えるきっかけを与えたことが確認できた。例えば、地域の方から 1970 年代に起こった土地開発の経緯が話され、当時本土との格差を埋めることや、仕事を作り出すことなどの目的があったことなどに言及された。その後の議論で、「過去の開発を緩やかに行っていけばよかった」「土地改良の際に伝統的な方法を考慮しておけばよかった」という意見などが出された。

(3) 過去を振り返るセッションを入れることで、高校生に石垣島の現在の状況に関する新しい気づきを与えていた。例えば、現在の石垣市内での生活が数十年前には当たり前のもではなかったこと、今のお祭りが当たり前前に実施されていると認識していたが、それが必ずしも当たり前ではないなどの意見がだされた。



図 1 (左) ワークショップの様子、(右) 同グループの Part 4 の結果

4. おわりに

異なる世代の人が集まり、地域の過去・現在・未来について議論することは、参加者が石垣島に対する意識を高める効果があったと考えられる。他方、今回のワークショップでは、将来像への道筋の策定まで議論が至らなかったことが今後の課題である。

参考文献

- 1) 西條辰義 (2015) : フューチャー・デザイン: 七世代先を見据えた社会. 勁草書房.
- 2) 渡部哲史、安西俊彦、岡直子、嶋田奈穂子、鈴木耕平、出村沙代、乃田啓吾、藤岡悠一郎、荒谷邦雄 (2024) : 石垣島未来ワークショップによる世代間協働と SDGs、農業農村工学会誌、92(4), pp.241-244